

夏秋トルコギキョウと 低温開花性花き（カンパニユラ）の組合せによる周年生産

県中農林事務所農業振興普及部

ふくしまからはじめよう。攻めの農業技術革新郡山地方協議会

（県中農林事務所農業振興普及部、郡山市、JA福島さくら郡山地区本部）

1 実証の背景・概要

(1) 背景

- 現状：水稲との複合経営では、育苗ハウスを利用したトルコギキョウは夏秋中心の作型が多く、後作として野菜（葉菜類）が作付されている。
- 改善方向：トルコギキョウの後作として、カンパニユラを導入し、計画的な花きの周年出荷を実証する。

(2) 実証の概要

○導入機材及び面積

導入資材：電照装置一式（赤色LED（鍋清（株） ダウンライト DPDL-R-9W）

実証面積：パイプハウス1棟 4a（間口8m×奥行50m） 栽植本数400本/a

○技術の概要

高単価の期待できる需要期の3月下旬に収穫するため、低温に遭遇しなくても長日条件で開花するカンパニユラ（チャンピオンシリーズ）を供試し、赤色LEDの電照により長日環境を作り、摘心栽培により側枝を多本仕立てし、少ない定植本数で多本数収穫する。



赤色LED

2 実証の成果

(1) 成果

- カンパニユラ・チャンピオンシリーズを10月に定植し、2か月株養成後、本葉15枚で摘心を行ったところ、均一な側枝10数本の発生を確認した。
- 3月上旬から4月下旬にかけて、1株から約10本、無摘心栽培と同様の切り花を収穫できた。
- 白熱灯（75W）を電照光源に使っていたときより、LED（9W）は消費電力が88%少なく、電気代を削減できた。



摘心後の腋芽発生



ハウス全景
（赤色LED電球による電照）

(2) 課題

- 定植から株養成期間が必要で、ハウス利用期間は準備期間を含め9月下旬～5月上旬で、無摘心栽培より長くなる。



切り花品質



管理作業中の生産者

(3) 導入による産地への効果

- 冬春期にカンパニユラを導入することで、品目のバリエーションが拡大するとともに、花きの周年生産が可能となる。

3 実証担当農家・産地より

- トルコギキョウと組み合わせることによって、周年花き生産が出来るようになり、花き市場とのつながりが強くなった。

経営モデル

県中農林事務所農業振興普及部
作物名：トルコギキョウ・カンパニュラ

トルコギキョウ生産者が9月咲き作型の後作として、冬期間にカンパニュラ・メジューム（電照＋摘心栽培）を導入し、計画的な花きの周年出荷を想定した経営モデル。（電源のあるハウスで新たに電照栽培に取り組むことが前提。）

前提条件

項目	内容
想定モデル規模	労働力 2名（臨時雇用1名）
	栽培面積 トルコギキョウ10a カンパニュラ10a
栽培方法	作型 トルコギキョウ：9月出し カンパニュラ：電照＋摘心
	栽植様式 トルコギキョウ：株間10cm畦間10cm 4条植 28,000本/a カンパニュラ：株間30cm畦間30cm 2条植 6000本/10a
	電照条件 カンパニュラ：間隔3mの高さ1.2m 23時～1時の2時間

導入コスト

資材名	数量	耐用年数	金額(円)
赤色LED ※1	100	7	300,000
ソケット付きケーブル ※2	6	7	146,000
合計			446,000

- ※1 鍋精社 DPDL-R-9W 赤色
- ※2 ソケット数量 100個
- ※3 5aハウス2棟分の導入コスト

項目	技術導入前又は慣行 (面積：10a)	技術導入後 (面積：10a)
出荷本数(千本)	トルコギキョウ 25	トルコギキョウ 25 カンパニュラ 27
出荷本数(千本/10a)	トルコギキョウ 25	トルコギキョウ 25 カンパニュラ 27
販売額(千円)	2,750	4,640
(単価円/本)	トルコギキョウ 110	トルコギキョウ 110 カンパニュラ 70
経営費(千円)	1,562	2,721
うち 種苗費	128	251
肥料費	84	172
農薬費	58	59
小農具費	2	4
諸材料費	56	289
光熱動力費	20	114
流通経費	732	1,299
減価償却費	400	400
雇用労働費	81	121
その他※	1	12
農業所得(千円)	1,188	1,919

補足説明
(注意事項等)

○定植後速やかに活着し生育を開始するように、大苗（本葉6枚）を使用する。
○摘心後、株あたり枝5本確保を目標とする。
○電照は、摘心後から発蕾まで行う。
○品種によって出荷時期が異なり単価が変わる。
○開花が遅れている場合は、ハウスローテーションがあるので補助加温を行い、遅くともカンパニュラは5月いっぱいまで終了することとする。

※その他：賃借料、共済掛金など